

“できる” 実感を得ることができれば 学校は楽しくなる

神戸ベルエベル美容専門学校

(兵庫県神戸市)

港街であり、観光都市としても多くの人を訪れる神戸市。その中心部に位置する神戸ベルエベル美容専門学校では平成17年にブライダル科を新設し、人材育成に力を注いできた。接客においてもプロとして高いスキルが求められるブライダル産業だが、不況の影響を受けやすい業種でもある。それだけに、専門職として、また一社会人として「より即戦力となる人づくりを」と教育に力を入れる同校の取り組みについて伺った。



おしゃれな外観の校舎で、
美容科、メイク・エステ・ネイル科、
ブライダル科の学生たちが学ぶ



バンケットやドレスルーム、
チャペルなどブライダル科の
実習施設も充実



楽しい学校、面白い授業のために 学校全体で工夫を

神戸ベルエベル美容専門学校が位置するのは神戸市の中心部である。神戸市は海沿いに大きなホテル、山沿いに異人館やゲストハウスが建ち並んでおり、行政や地元企業は近年、観光だけでなくブライダル産業に力を入れている。そこで働く人材を育成しようと同校では美容科、メイク・エステ・ネイル科に加え、5年前にブライダル科を開設した。

「楽しくなければ学校じゃない!! 面白くないければ授業じゃない!!」。校舎に入るとまず最初に、パネルに書かれたこの教育目標が目

飛び込んでくる。「学生が積極的に学び、専門知識を得るだけでなく、実際に力を発揮できるように努めてもらうには、これ以上の目標はないと思います」と語るのは玉置大造校長だ。

「楽しさ・面白さとは、単にワイワイ楽しいということではなく、原点には『できる』という実感があると考えています。誰でも目標を現実できると楽しい。学んだことが実践できたと実感できれば、みんなもっと楽しくなり、やりたくなる。その循環を目指しているのです」。

同校の最大の目的は、業界で即戦力となる人材を育成・提供することだ。その一方で、最大の顧客はといえば、それは学生である。学生が満足しなかったら意味がない。で、どうすれば満足してもらえるか。それをとことん追求し、2年という短い時間で学生が存分に活動できるようにさまざまな工夫を行ってきた。

その一つが「生徒評価制度」だ。「学生が得意ななかったら、それは教員の責任」とまで言い切る同校では、学期ごとに30項目からなるアンケートを行い、学生が教員を評価する制度を取り入れている。内容は多岐にわたり、教え方やあいさつなどのマナーのほか、「やる気と熱意があり、クラスを盛り立ててくれる」「一緒に泣いたり笑ったりしてくれる」「褒める」「叱る」「勧める」「禁止する」といったメリハリがある」といった項目も。まずいところは改善し、よいところは継続していくための試みで、高評価を得た教員の胸には「感動」「お

玉置大造校長



(右から)
ブライダル科の奥田有佳子先生、
1年生担任の小滝美帆先生、
ビジネスマナー担当の衣笠節子先生



見事」などと書かれたバッジが輝く。

「授業がつまらなければ、学生は積極的に取り組みません。私たちはいつも『どうしたらやりたくなるか』を考えるのです。例えばテーブルセッティングでは、お手本だけ教えるのではなく、シルバー食器をきれいに並べるコンテストをしたり、その採点時にも『惜しい！3カ所残念なところがあります』とだけ言って自分で考えさせるようにします。もっとできたはず、と学生たちが悔しがり、何ができるか考えるようになればこっちのもの。授業だけでなく行事でも、どうやったらワクワクドキドキを作り出せるか。他学科の教員とも相談しながら、日々アイデアを練っています」と、ブライダル科の奥田有佳子先

生もその意欲を語る。

また、「できる」ことを重視する同校では、教員に多くのスペシャリストを配置しており、ブライダル科でも設立当初からプランニングや衣装などの専門家が指導に当たっている。奥田先生もかつてはブライダルプランナーとして活躍していた一人。現場に近い教員が日々の授業を通して、実際の仕事や必要とされる技術、資質について語る。それを見聞きして学ぶことが、一番の勉強になるということだろう。

グループワークを軸に 意欲と自信を引き出す

ブライダル科には毎年80名の学生が入学してくる。1年生の4、5月は学生同士の関係づくりが優先だ。「宿泊での研修や、自己紹介を兼ねたプレゼンテーションなどを取り入れ、人前で話したり人の話を聞いたりする基礎をつくり出す」と奥田先生。実習が始まると、メイクや着付けなど顔や身体に触れる機会も多いため、まずは互いに人となりを知ることが大事にしているのだという。

専門的な授業が始まるのは6月ごろ。校内で実習と座学で基礎を学び、9月にはインターンシップを行う。駆け足のようにだが、2年間で現場に出られる人材を育成するため、できるだけ多くの実践を行うのが同校の方針だ。実践しては理論で固め、また実践する。この繰り返しにより2年間でしつかりと「で

きる」人材になってもらう。そうならなければ、学生にとつても、就職先の企業にとつても意味がない。

2年生になるとコースが2つに分かれる。お客さまの要望を聞き婚禮の企画等をするブライダルプランナーコースと、衣装などの提案とスタイリングをするコスチュームアテンダーコースだ。

「どちらも相手の話を聞く力が必要ですが、プランナーは積極的に自分から提案したり人前で話したりするのが得意な人、コスチュームアテンダーは女性らしくファッショニ性があってサポート力のある細やかな気配りができる人が多いです。ホテルやゲストハウスなどでアルバイトしながら実践を積んでいる学生もおり、入学時には漠然と憧れていた職業の本質を実感し、自分の資質を見極めていくように思います」(奥田先生)。

同校での学習は基本的にグループワークである。4〜5人ずつに分かれ、そのメンバーで1年間を通して課題や実習に取り組む。また、クラスにはリーダー、サブリーダーがおり、行事や学外での実習のまとめ役も務める。成功体験の少ない学生も、グループやクラス内でそれぞれの役割を果たすという小さな経験の積み重ねにより、少しずつ自信を付けていくという。

同校では、以前から学校併設の美容室やメイク・エステ・ネイルサロンで学生が店員とな



ブライダルプランナーコースの井筒成美さん(右)とコスチュームアテンダーコースの橋本実咲さん

ブライダルプランナーコースでは資格取得のため、ブライダルについての知識を深める。総仕上げでは、教員がお客さま役になり、最終的には一人ずつが模擬披露宴のプランニングをし、プレゼンテーションを行う



コスチュームアテンダーコースの着付け実習。こちらも資格取得のため時間内に着付ける厳しい指導が行われる。浴衣、留め袖、振り袖、最終的には白無垢の着付けを目指している



昨年11月に行われた校内施設での挙式。学生たちが全てを取り仕切った



言葉遣いや接客には特に気を使う

「お客さまにとっては一生に一度の大イベント。要望を聞いてプランニングし、衣装、セッティング、進行と全てを学生が行うことに不安もありましたが、プレッシャーを乗り越え、やり遂げてくれました。最後にはありがとうと言葉を掛けていただいて、本当にいい経験になったようです」と先生方は顔をほころばせる。

ブライダルは慶事であるだけに、スタッフには高レベルのマナーが要求される。特に言葉遣いは、よく使う言い回しや使ってはいけない表現などもあり気を使う部分だ。学科では1年生の5月中旬から社会人の基礎となる「ビジネスマナー」の指導を行っており、外部講師の衣笠節子先生が講座を担当している。「普段の授業でもあいさつや言葉遣いなどは厳しく指導しています。学生は他の授業やアルバイトでも、学んだマナーをしっかりとし、吸収しているようです。振り返り、気があ

ります」。

その成果を確認するため、毎年ビジネス実務マナー検定を受験しており、平成22年度には団体優秀賞を受賞した。過去には文部科学大臣賞を受賞したこともあり、「検定の成績で先輩を抜こう、文部科学大臣賞を目指そう!」と、毎年頑張っているという。

橋本実咲さんはコスチュームアテンダー、井筒成美さんはブライダルプランナー、それぞれの目標に向かって勉強中の二人も昨年、3級に合格した。「言葉遣いはインタビュンシッパやアルバイトですぐに使えることが多く、意識して実践しているうちに自然にできるようになりました。また、笑顔で仕事をするこの大切さもよく分かりました」と橋本さん。井筒さんも「お手数ですが、恐れ入りますが、といったクツション言葉もスムーズに言えるようになり、実習先の電話応対でも堂々と自信を持って受け答えができました」と胸を張る。就職活動でも、他校の学生に「一歩先んじている」と実感しているそうだ。

開設から5年。ブライダル科の卒業生はホテルやゲストハウス、ドレスショップなどに就職し、着実に成果を挙げている。認知度も高まり、ホテルなどから、ブライダルフェアの1コーナーを任せたいと声を掛けてもらうことも増えた。体験を通じて、そしてまた理論を学びながら実践力を育成する。同校の人材づくりは、まだまだ発展の途中である。